

このところ日本美術への関心の高まりには、特筆すべきものがあると思う。絵順の入れ替わりが判明して最近話題になった国宝絵巻『鳥獣戯画』の、昨年の特別展では2時間以上もかかってやっと展示室にたどり着いた記憶があるし、今年の生誕300年を記念した若冲展の入場者数は40万人を突破したとのこと。

凄まじい人気ぶりだが、美術館の数や入場者数では世界有数にもかかわらず、日本人は美術品を「所有すること」に、まだまだ不慣れだという。日本美術を中心に江戸から現代までの美術品全般をあつかう美術品商〈加島美術〉を訪ね、京橋3丁目足運を運んでみた。道路を挟み向かいにそびえる東京スクエアガーデンの超高層とは対照的な、クラシックな外観の4階建てビルで、加島美術が京橋2丁目からここへ移転してからは3年ほどになるそうだ。

1階入口のガラス扉を抜ける

と、まず正面に出迎えたのは浦上

玉堂の山水画。モルタル壁の現代的な空間に、池大雅や横山大観、下村観山といった、日本美術を専門に学んでいなくてもその名前は知っている大家の作品が、惜しげもなく陳列されているのに驚く。しかもガラスケース越しではなく目に直に触れるから、美術館で観るそれとは感じ方も違うのだ。たとえば江戸後期に活躍したという絵師、祇園井特の美人画の、絵のなかで皮膚呼吸しているかのように生々しい表情を間近でじつと見つめていたら、なぜか江戸川乱歩の小説『押絵と旅する男』の世界を連想してしまった。

いま掛軸を飾るにも床の間はおろか和室すらない家が増えていく。1階の展示はそんな現代の生活のなかで日本美術を愉しむことを提案する場でもあるそうだ。奥には現代作家の書や写真なども展示している。木の階段をのぼり2階は、一転して土壁に茶室も設けられた和の空間になっていて、床の間にさりげなく掛かる

## 新お散歩日本橋繁盛記

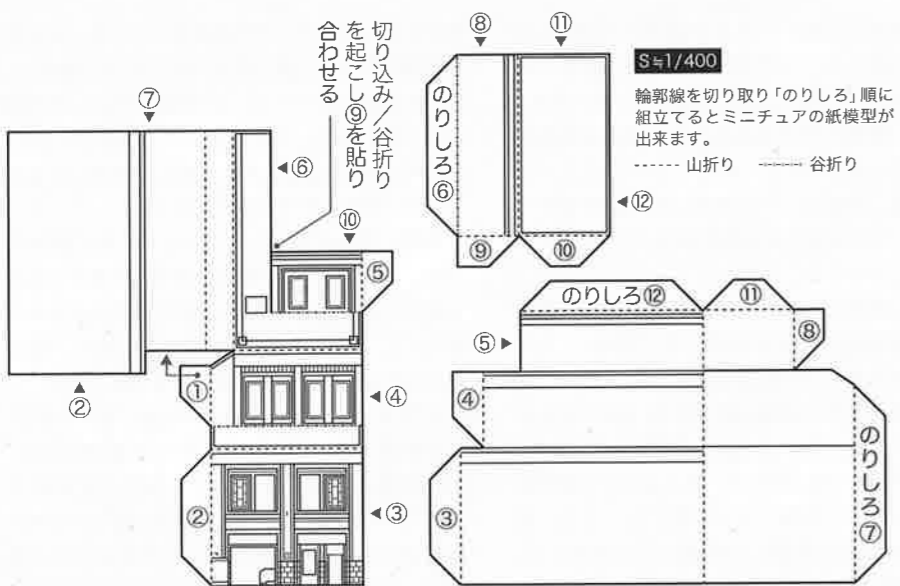
一色九月

掛軸の、与謝蕪村の名前を見て三たび驚く。

欲しくなったところでどう逆立ちしても追いつかないが、最初

### 【附録】日本橋京橋 たてももの図鑑

加島美術（京橋3丁目）



に観た浦上玉堂の山水画を再びじっくりと眺めなおしていると、ふつふつと「物欲」がこみ上げてくる秋なのであった。

最後に、この号が出るころに

は会期の終盤で残念なのだが『美祭—BISA I—』という、

春と秋の美術品展示即売会があり、10周年・20回目を迎えた今秋は11月3日（木）祝まで開催している。眺める美術から所有する美術へ、入門にも適した催事とのことなので興味がおありの方は是非。



### 加島美術

▲京橋3-3-2 ☎03-3276-0700  
●10時～18時 | 日祝休 ▲京橋駅  
3番出口より徒歩1分

いしきくがつ 昭和39年神奈川生まれ。日大藝術学部卒、深川在住。  
不感をとうに過ぎて尚、道に惑ってばかりの日々であります。